

めくるめく舞台の魔法を編み出す ジャンがまたまたやってくる！

文中野三希子



『リチャード三世〜道化たちの悪夢〜』より
写真: Tristan Jeanne-Vales

めくるめく舞台の魔法を編み出すジャンがまたまたやってくる！

彼が静岡に登場するのは、今回で四度目になる。初めての公演は二〇一一年。絵本として日本でも親しまれていく「スガンのやき」を、静岡・北九州・鳥取で上演した。この滞在中に出会ったSPA俳優・三島景太とともに創作した「ジャン・X・K・E・I・S・A」の隊長退屈男は、静岡での初演の後、フランスでも上演。さらには、一八年度の四月、「ふぶのくに」にせかい演劇祭で自ら道化(クラウン)姿で主人公を演じたリチャード三世が、満員の客席に熱く迎えられた。

そしてついに、ジャンがSPACのシーズン作品の演出家として登場する。みんなトリコ(ロール?)になること間違いなし！



写真: Tristan Jeanne-Vales

ジャン・らんべー=ういんど Jean LAMBERT-WILD

1972年、南インド洋に位置するフランス海外県レユニオン島生まれ。劇作家・演出家・俳優。特異な風土で育った詩的想像力と、魔術的演出が高く評価され、異例の若さでフランス各地の国立演劇センターの芸術監督を歴任している。



私が妖怪を研究するきっかけとなったのが、地元の神社で神主を務めていた祖父の話からです。祖父が暮れ時に境内の掃除をしていた所、杉の木の上に三ノ四メートルもある大きなカラスが現れたそう。

近年私の研究によりそれは天狗の亜種であることがわかってはいますが、まだまだ調査対象は尽きません。例えば、先日目撃例にあったのが「からかさお化け」。物を大切にしないかった小学生の男の子が

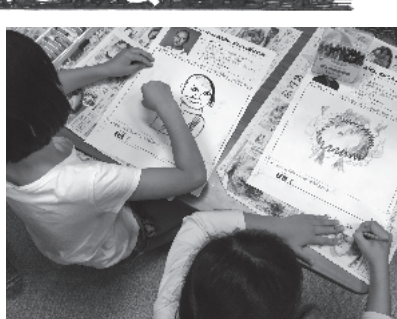


妖怪博士 佐野雄基

夜寝ようとしたところ、大きな目玉に一本足の怪物が窓の外に立っていたそうです。妖怪というのは意外と身近な存在で、気付けばそばにいるもの。もし妖怪を見かけたという方がいらしたら、是非私にご一報いただけたら幸いです。

妖怪お絵かき大会レポート

静岡県清水区の高部東児童クラブで、今回の妖怪お絵かき大会を行いました。俳優の写真とヒントとなるキーワードを手掛かりに、ユニークなオリジナルの妖怪が次々と生まれました。



掲載しきれなかったたくさんの妖怪たちを、2月16日(土)から劇場ロビーに展示します。

編集後記

子どもたちの「形」にしようとする力は、照れや苦手意識をこいといふと飛び越えどんどん加速していきました。子どもたちの想像力、大人も負けてない感じが、と舞台に結実します。

「すばく新聞」今シーズンもお読みいただきありがとうございます。

すばく新聞 第8号 (制作部 坂本彩子)

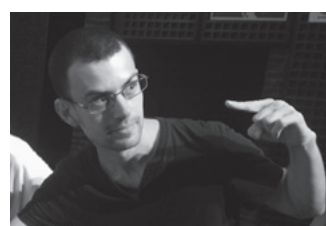
協力 高部東児童クラブの皆さん
一面情報欄デザイン 阿部太 (TACHIBANA)
組版 坂本彩子
編集 (広報班) 坂本彩子、内田穂子
(手書き班) 永井健二、編集部



ジャンの故郷 レユニオン島ってどんなところ？

ポール・フランセスコーニさんに聞く

島には神秘的なもののや精霊の話も多く、魔術的な体験をする「選ばれた人」もいます。僕も子どもの頃に、言い伝えを聞いた、近く海辺で砂に書かれた不思議なサインや五芒星を見たりました。島に伝わる神話に、火山に住む年老いた魔女「カル」が出てきます。「カル」は奴隷制時代の悪い雇い主だが、世界の恐怖のために老化した女が、森や火山、そして夢の中を彷徨っているのだと言われます。ジャンさんと僕の島での体験は異なりますが、二人とも詩を愛しています。世界の様々な文化が混ざる場所なので、詩のイメージが湧いてくるのだと思います。



レユニオン島出身。フランス・リモージュで劇作家・演出家として活動。19年にジャンが芸術監督を務める劇場で「カル」の神話をベースにした新作を上演予定。

フランス語講座 #4 Monstre

『妖怪ウォッチ』と『ポケットモンスター』のおかげで、フランスの子どもたちにも日本は「モンスターmonstre(小怪物)の国」として知られるようになりました。

フランス語の「モンスター」の語源は、英語の「monster-monster」と同じく、ラテン語の「monstrum-monstrum(怪異、怪物)」。

これは、「思い出させる、警告する、教える」という意味の「モネオー-moneo」という動詞から来ていて、「不吉な前兆」という意味もあります。日本語の「妖怪」という語にも、災いを招きそうな不吉な様子という意味がありました。

ふだんは人間の目には見えない、人間の力を超えたものが見えてしまったときというのは、何かを思い出し、警告に耳を傾けなければならぬときなのかもしれません。

睡眠欲

イエスの孤独はいかばかりだったろう。死の予感に怯え、悲痛の祈りを捧げている中、最も身近な者たちは高いびき。この祈りのすぐ後にイエスは逮捕される。

神の子が死に向かっているとき、私たちは不覚にも眠りに落ちてしまった。弟子たちは、人類の歴史の中で最も緊張して眠ればならなかったそのとき、眠ってしまったのである。なんと呑気だったのだ。彼らは後に痛烈に後悔したに違いない。それとも、この後悔の念を植え付けるために、睡眠欲はあったのか。

睡眠欲

眠りたいという欲望ほど、何のためにあるのか、わからない欲望はない。こんな欲望はなかったらよかったのに……少なくともイエスの弟子たちはそう思ったはずだ。

「最後の晩餐」の後、イエスは弟子たちを連れてオリブ山に行き、祈る。神様、この苦しみの杯を私から取り除いてください。と。このときイエスは弟子たちに「私が祈っている間、目覚めていなさい」と命令する。にもかかわらず、弟子たちは眠ってしまった。